

普段が出るということ

昨日、三年の女子生徒が、高校入試の願書の下書きをしていますが。彼女の受験する学校は、近いうちに出願をすることになっていきます。鉛筆で丁寧の下書きしている姿を見て、私は思わず声をかけてしまいました。

「受験する学校の職員は、君のことを知らないからね。一足先に願書が届き、それをみてどんな中学生なのだろうと想像するからね。まさしくこの願書が君の顔になるよ。」

「私の顔ですか……先生、名言ですな！」

緊張してペンを走らせながら、その生徒は私の言葉がけに、ふとリラックスしたようでした。一画一画丁寧に、そして、正確に下書きする彼女の姿を見て、私はますます応援したくなってきました。

中学を卒業するとはこういうことです。自分の進路選択は、自分で責任を負うしかありません。それができなければ、中学で何を学んできたのかということになってしまいます。保護者が書くべき欄は記入してもらったとしても、自分で書くべきところは、自分の筆跡で埋めること。そして、その筆跡の責任を取るのは親ではなく、自分です。腹をくくって、公の文書に記入すべきです。

「えっ、そんな公の文書に記入することなんて初めてだよ」という声が聞こえてきそうです。そうですね。これまではそんな文章に触れていませんからね。ほとんどの人が初めてのはずです。しかし、同じ初めてでも、すらすら丁寧な筆跡で書ける人と、ドキドキしながら、ペンに余分な力を入れて一字一字確かめながら丁寧に書く人がいるのはなぜでしょうね。

考えるべきは、そこだと思います。普段から読み手を意識して、文字を綴っているかどうか。いや、読み手を意識していなくても、丁寧に文字を綴る習慣があるかどうか。その差が公の文書を前にした時に表れるのではないのでしょうか。

掲示物の筆跡、予定ホワイトボードの筆跡、提出物の筆跡……すべて読み手が存在します。その人たちが読みにくさや不快を感じるようでは、公の文書に記入するときは推して知るべし。普段できないことを、公の文書を前にしてやろうとするのですから、余分な力が入ったり、いつも感じない緊張を味わったりするものです。

願書を書く生徒の中には、失敗をして何枚も書き直しをしなければならなくなる人もいます。普段やらないことをやろうとするのですから、ミスも多く生まれます。

昨日の女子生徒は、下書きの文字が見事でしたし、私の見る限りでは住所も保護者の名前も正確に書いていました。あの筆跡なら、それを見る側に好印象を与えることだろうと私は思いました。こういうのを「平生往生」と言います。簡単に言うくと、普段が出るということですよ。さあ、あなたの筆跡はどうですか。三年生ばかりでなく、一、二年生にも言えることですよ。

(一月十二日 記)